

# 「名人」川端康成全集第 11 巻から

## その 4 引退碁の終局場面

川端は、引退碁の終局場面を次のように記します。

「名人の引退碁の終わった時間を正確に言うと、昭和十三年十二月四日、午後二時四十二分であった。黒の二百三十七手が手止まりであった。そして名人が無言のまま駄目を一つつめた瞬間に、【五目でございますか】と立ち会いの小野田千代太郎六段がいった。つつしみ深い声であった。名人の五目負けを分かっているものを、ここで作ってみる、その労をはぶこうとした、名人への思いやりあるう。」小野田六段は名人の弟子の一人です。

「対局室につめかけている世話役の誰一人として、ものが言えない。その重い空気をやはらげるやうに、名人がいった。

【私が入院しなければ、八月中に、箱根ですんでゐた】この碁の持ち時間は 40 時間です。白の消費時間は 19 時間 57



引退碁 右端が川端康成

分、黒は 34 時間 19 分だった

とあります。当時、高段者の持ち時間は 10 時間が見当だったようです。この碁に限って 40 時間という空前絶後の持ち時間となったとも回想しています。

若い大竹七段が打ち終わったとき、「先生、ありがとうございました。」と名人に礼をしたまま、深くうなだれて身動きもしなく、両手を膝にそろえて、白い顔は青ざめていた、とも記します。

川端は、この老名人の碁界からの引退をなんとか記念するような場としたいと、引退碁の主催者に懇願していたような気配があります。名人を死ぬまで名人の位として残しておきたかったと考えていました。それは、日本のいろいろな芸道の流儀や家元、免許のようにそれが封建時代の遺物であっても、名人争奪戦のような碁を打たねばならなくなった状況を嘆くのです。

秀哉名人は、新旧の時代の境に立っていた人であるというのが川端の見立てです。名人は旧時代の名人というものの精神的尊崇を受けるとともに、新時代の名人というものの物質的な功利も得たというのです。それまでは、65の老齢で勝負碁を打つ名人などはいなかったのです。しかし、引退碁のように、今後は打たない名人などの存在は許されない時代になったと諦観するのです。そして秀哉名人は最後の人だったと。

名人にも生涯の運命をかけ戦い幾度もあったようですが、この一番という碁に負けたことはありませんでした。名人になるまでの戦いは勢いであるとしても、名人になってからの、殊に晩年の戦いにまで、不敗を巷から信じられ、自分もそれを信じて臨まねばならなかったのは、むしろ悲劇だ、とも川端は言います。

(2023年7月24日 大和田囲碁同好会 成田 滋)